評価の源泉としての文化

――異文化接触の視点から――

木　村　英　憲

はじめに

この小論は，本能と個性との比較を通して見えてくる文化の諸側面と，また異文化と接触して見えてくる文化の諸側面をスケッチ的に描きだそうとするものである。その諸側面のうちとくに評価の面に焦点を当てて，日本にしかないと思っていた否定視している事象がモデルとして，評価者として仰いでいるアメリカ文化に存在している場面に遭遇した時の反応を見ようとするものである。その反応には反証例に遭遇したときの違和感やショックを抑圧せず，直視して日米の実態の追求に向かうというものもあれば，違和感やショックを抑圧してでもモデルとしてのアメリカを仰ぎ続けて日本を否定視するものもある。小論は，まずはこれらの反応とアメリカを基準にして日本を評価する心的態度の接続と変容にかかわる実証研究の分析枠組みの構築を目指すものである。したがって事例の分析そのものとその結果は次の論文で報告することにしたい。

Ⅰ　制約としての文化，恩恵としての文化

1　本能と個性，文化とインターアクション

人は人間としての本能と，個々人独自の感性や欲求をもって生を受けるが，必ずしも本能や個性のままに生きるわけではない。たとえば誰でもおなかがすいたら食べたくなる。おなかがすくと食べたくなる（食欲がわく）のは，誰から教わったわけでもなく，また誰かがおなかがすくのを見ておなかがすくわけでもなく，食べたくなるわけでもない。またこれらの生理的欲求は時代や地域を越えて誰にでも見られるものである。従ってこれらは本能である。

しかし食欲がわいたら，つまり食べたいと思った時，本能の赴くままにその時，その場で食べるわけではない。授業中，あるいは会議の最中，お腹がすいたからといって，その場で食べることは通常ない。授業中や会議ではおなかがすいたのを我慢するからである。この我慢は本能に組み込まれたものではない。この我慢の背後にはいつ，どこでは食べてはいけなく，いつ，どこなら食べていいかというルール，シナリオがある。人はこのようなルールないしはシナリオによって欲求が制御されている。人の欲求を抑え

たり解放したりするルールやシナリオを文化 culture と呼ぶ。

本能は生まれつき持っているもので，放っておいても開花する。カメやいかの赤ちゃんは誰もまわりにいなくても，誰からも教わらなくても自然に泳いだり食べ物を手に入れる行動をする。人間はまわりに人がいないと，そしてその人たちとのインターアクションがないと，言葉が話せるようにならないばかりか，直立歩行といったことさえできないようである。

そのことの例証として，いわゆる野生児と呼ばれる子どもたちがいる。屋根裏部屋とかに閉じ込められ，人との接触を断たれて食事だけを与えられて，生き長らえられていたところを発見された子どもたちである。彼ら，彼女らは言葉も話せず，おしっこもうんちもところかまわずしていた（シング　p. 73）。直立歩行もできなく，ほとんど移動することができない子もいれば，狼のように四つ足で走る子もいた（シング　p. 67）。

野生児たちはおなかがすいたら，ところかまわず食べた。いただきますやお祈りといったこともなく，手を使わないで犬や狼のように口で食べたり，手づかみで食べた。焼いた肉は食べないで生肉しか食べない野生児もいた（シング　p. 53）。

2　インターアクションを通して体得される文化

これら野生児たちもきちんとインターアクション（コミュニケーションを含めた相互作用）を他の人間からされていれば，たとえばはしの使い方，スプーンやフォークの使い方を教わっていれば，それらで食べていたことだろう。素手で食べる食文化圏なら，ごはんやおかずを右手でどのようにして丸めて口に持っていくか教わっていたら，そうやって食べていたことだろう。

人間はまわりに誰かがいて，その人たちとのインターアクションを通して初めてその人たちの文化を習得していく。生まれてすぐお母さんの胸に抱かれて言葉をかけられながらおっぱいを飲んだり，泣いたら言葉をかけられながらあやしてもらったり，くすぐりや「イナイイナイバー」や「タカイタカイ」や「オツムテンテン」などの遊びをしてもらったりして，言葉を覚えたり，表情や動作の背後にある感情を読み取る能力を開花させていく。野生児たちが一様に無表情か，意味もなく攻撃的な表情をするのは，このようなインターアクションを経験しなかったためだと考えられる。

人が直立歩行ができ，言葉を話せ，食器を使って食べられるのは，本能によるのではない。これらの行動をしているところを見て，それを見よう見まねでまねをして，あるいはこうやって歩くのだよ，アレはワンちゃんだよ，こうやって食べるのだよと教わって初めてできるようになるのである。

3　評価を通して内面化されるシナリオとしての文化

文化はせりふとかト書きのない台本，シナリオのようなものかもしれない。赤ちゃんあるいは幼児は，大人が見えざるシナリオにそって行動するのを見て，自分もまねていくうちに，そしてまねたことを褒められてまたもっとうまくまねようとする，といった

インターアクションを重ねていくうちに，言い換えれば，シナリオに沿った行動を繰り返していくに，ある状況では特定のことをしたという欲求，たとえば夕方になったら晩ごはんが食べたいという欲求が自然にわき起こり，そういう欲求が起きていることを特に意識することなく，夕方には晩ご飯を食べるようになる。

それとは表裏一体の関係で特定の状況以外では欲求を我慢しなくていけないということを学習する。おながすいたので夕食前に食卓に並んでいるおかずを食べたら，「いい子なんだから，つまみ食いしちゃダメよ」（東　p. 78）と注意されていくうちに，食べたい時に食べるのはいけないことだというという認識をしていく。しかしこのような認識だけでは我慢に至らない。叱られるとか後ろめたいことをしたという感覚（情動）がこの認識に伴って，おそらく最終的には「自分はいい子なんだからつまみ食いしない」といういい子アイデンティティがこの認識に伴って，食べたい欲求を我慢させるようになるのだろう。

4　文化の相対性，自明性，閉鎖性

後ろめたさを感じても，いい子アイデンティティを持っていても，我慢できなくてこっそり食べてしまうこともある。食べている最中は早く食べてしまわないと見つかると焦っていることだろう。食べてからも，バレたらどうしようという不安に悩むことだろう。またバレたら我慢するいい子というアイデンティティを剥奪されて「いけない子」に転落するのではという不安も生じるだろう。

しかしつまみ食いをいけないことではないとする（文化の）家庭に生まれたら，あるいはそういう社会に生まれたら，そういう社会ではつまみ食いという否定的な含みを持った言葉もないことだろうが，とまれ「夕飯まで我慢していい子ね」と誉められることもなく，つまみ食いしていけないと叱られることもないだろう。だから食間に食べたからといって，後ろめたさを覚えたり，しかれるのではという不安を感じることもないだろう。同様に夕飯まで我慢していい子というアイデンティティも生じないだろうし，逆に夕飯まで我慢しなさいという言いつけを守らない「言うことを聞かない反抗的な子」という否定的アイデンティティも生じないことだろう。

何々と言えばこれというのも，時代や地域によって異なる文化の一つである。たとえば赤飯と言えば小豆というパターンがある。赤飯を作る時に小豆にしようかどうか考えることはない。そういった意味で無意識のうちに小豆にする。赤飯と言えば小豆というのは，意識することのない空気のようなものである。そのため時代や地域によって異なるのに，みな，どこでもそうしていると思っている。

北海道出身の筆者は赤飯といえば甘納豆と思っていた。ラーメンやごはんにはバターをかけるものと思っていた。別れる時は，どこでも「したら」と言うものだと無意識に思っていた。

内地に来て，初めて赤飯に小豆を使う人たちがいることを知ってびっくりした。しか

し逆に内地の人間に「どうして赤飯に甘納豆なんか!?」とびっくりされた。そしてこのことに驚いたし，軽く見下された感じもした。

もしかしたら赤飯に小豆って変なのかなと思って，答えを探したが見つからなかった。しいて言えばみんなが昔からそうしているからということしか思いつかなかった。同様に内地の人間にしてもなぜ小豆なのと聞かれても，みんながそうしているからとか，昔からそうなっているとしかいう答えしかないことだろう。ウェーバーの言う伝統主義である。

赤飯には別に小豆でも甘納豆でもかまわないのだろう。しかし赤飯＝小豆という食文化圏の人にしてみれば，甘納豆入りの赤飯という非常識なものは考えただけでも違和感を覚え，実際に食べても予想通り，口のなかに違和感が実感として感じられることだろう。実際，筆者が内地の友だちに甘納豆入りの赤飯を食べた時の反応がそうだった。

しかし中にはおいしいと言ってくれる人もいた。中には我慢して食べていくうちに，意外においしいと思うようになった人もいた。かく言う筆者も甘みも何もない小豆の赤飯は，最初のうちは味気のないものだった。しかし何度か食べていくうちにそれまで気づかなかったおいしさが感じられるようなった。他方，「えっ，赤飯に甘納豆！」という反応にいちいち説明するのがおっくうになって，甘納豆入りの赤飯のことは北海道人がいるところ以外では，あるいは甘納豆入りの赤飯に理解を示す内地の人間がいるところ以外では，話さなくなっていった。

5　意味づけ，感情の促し源としての文化――季節感を例にして

人々は文化のシナリオが促す欲求に促されて，特定の感情とともに行動する。背後に文化のシナリオのあることは意識していない。なぜ特定の行動をするか自ら問うこともないが，あえて問われれば，昔からそうしているからとか，誰でもどこでもそうするものだ，そうするのが自然，当たり前，ふつうという答えしかない。

たとえば12月になると「もう，12月か！　この間お正月だと思ったら，もう今年も終わりか！」という感慨がわき起こり，お正月休みに入りクリスマスをすぎると，いよいよ年賀状を書かなくてはと思いながら，大掃除をしたりお節料理の食材を買い出しにいったりして年の暮れを感じる。いよいよ大晦日になると，紅白などの年末の特番を見て，「行く年来る年」が中継する除夜の鐘を聞いて，「あぁ，今年も終わって，新しい年が来た」と感じる。初日の出を見に行ったり，初詣に行ったり，年賀状を見て一年の始まりを感じる。

しかしこれは太陽暦の1月1日の話である。中国や台湾，韓国，北朝鮮のように，また明治以前の日本ではお正月が旧暦のところでは，新暦の1月1日には新しい年になったというわくわく感などの感慨はない。

同じように4月1日が日本では学校や職場，政府の年度の初めである。3月にはそれに向けてぴかぴかの一年生というコマーシャルが流れるのを聞いて，児童・生徒・学

生，教師はまた新学期が始まる季節だと思うだろうし，新しく小学生になる子どもたちは不安と期待に胸ふくらませていることだろう。しかし新年度が9月から始まるところでは4月にはそのような感慨はない。4月から新年度が開始する文化圏では，夏休みは1学期と2学期，前期と後期の間の休みであるが，9月から新年度が始まるところでは，夏休みは4月から新学期のところの春休みのようなものであろう。

II　個性と文化の相互作用（インターアクション）

1　個性

人が生まれつき持っているものとしては，本能以外に生まれつきの性格とか好き嫌いとかあれをしたいこれをしたいという時の欲求とか，感性とか発想とか能力いったものがある。能力については「あれは天性のものですね」とか，感性や発想については「あのセンスは生まれつきのものですから，あのセンスのない人にはどうしようもない」といった言われる方がされる。天性とかセンスはなにか突出した能力とか感性に限定されている印象がある。突出，非突出のいずれの性格，能力，好き嫌い，感性を含めて，ここではこれらをかりに個性と呼ぶことにする。

生まれつきという点では本能も個性も共通するが，両者の違いは，本能はたとえば熱いものを触れば手を離すとか個人を超えて共通した反応を引き起こす。しかし個性は人によって違うものである。小論で注目したいのは，両者とも文化の影響を受けるために，人はこの生まれつきの本能や個性通りに行動するわけではないという点である。

おなかがすいたら食べたくなるという欲求，食欲は本能である。しかし何を食べたいかには，個性の影響と文化の影響に加えて個性と文化の相互作用（インターアクション）がかかわっている。

2　文化による影響　食べ物の好みを例にして

どういう食べ物が好きかで言えば，甘いものが好き，塩辛いものが好きと，濃厚な味が好き，淡泊なものが好きと人によっていろいろである。これらは単純に個人差かと言えば，必ずしもそうではなくて，個人が生まれた落ちた社会の食文化によるところが大きい。たとえば私が小さい頃は大人は甘いものは苦手，甘いものは子どもが好き，あるいは女子どもは甘いものが好きだけど，大の大人がケーキなんか食べる物ではないという空気があったような記憶がある。

そういう食文化では男の子は成長すると甘いものが好きな子ども時代から脱して，塩辛いものが好きになるという期待が子どもにされて，この期待に誘導されてこういう変化が生じるのだろう。まだ甘いものを食べているという周囲の目もさることながら，子どもは自分は子どもでない，もう大人だというアイデンティティに基づいて，次第に甘いものを食べたいという欲求を抑圧し，背伸びして我慢してでも塩辛いものを食べていくうちに塩辛いもののおいしさが分かるようになるという過程を経て，このような変化

が生じるものと思われる。

このような予定調和的な変化を事実として目の当たりにしている食文化の人たちの目には，女子どもは甘いものが好き，男は甘いものが好きでないという本性，本質があるように感じられる。本性，本質というのはどこでも，みなそうという特性（普遍性）に加えて，いつでもという特性，すなわちずっとそうだったし，これからもそうという不変性も想定されている。

しかし甘いものは女子どもの食べる物，大人は食べないというシナリオ，すなわち食文化は相対的なものである。不変なものではなく変わりうるもので，シナリオが変わるとそれに応じて個々人の味覚も変わる。たとえば私が大学進学で東京に出てきた1968年，新宿の紀伊國屋の地下のソフトクリームコーナーで列をなしているのは女子高校生とかOLだけで，その列に加わるのは勇気がいた。しかしパティシェやスイーツという言葉がテレビで聞こえない日がないくらいの現代の日本では，コンビニであるいは高速道路のサービスエリアで，ショッピングセンターのフードコートで成人男子がふつうにソフトクリームを食べている光景を見かける。

また食文化は普遍的なものでもない。甘いものは女子どもの食べる物というシナリオがない社会では，大人の男も甘いものをふつうに食べる。たとえば砂糖のかたまりかと思われるほど甘くてくどい，客観的な言い方をすれば甘さの抑制されていないケーキやソフトクリームを大人も子どもも関係なく食べるアメリカのような社会に生まれる落ちると，大の大人になっても甘いもの好きのままである。

3　白紙説　vs　個性説

ちなみに生まれつきのセンスとか天性，つまり生まれつきの個性といったものがあるというのを事実と言うよりは一つの説とすれば，そんなものはないとする説もある。人は白紙の状態で生まれてくるのであって，感性とか好みとか発想とか能力などは，生まれてからの環境によって注入されたもの，決定づけられたものであるという考え方である。白紙説と呼ばれる考え方である。

この環境には文化も含まれている。この説が当たっていれば，100人が100人，文化のシナリオに沿った感性や発想法，好み，欲求を持ち，それに促された行動をしていることになる。

しかし人は100％文化のシナリオという後天的な環境に決定づけられるとする白紙説がどうも違うのではと思われること，すなわちどうも生まれつきの個性があって，それが個人差を生みだしていると思われることが多々ある。たとえば筆者には娘が二人いるが，上の娘が二歳ぐらいの時，娘の祖父が酒のつまみにしていたからすみを，「ちょうだい」と言っておいしそうに食べたことがあった。

これを見て私は「子どものくせにずいぶん変わったものを食べるな，これは将来酒飲みになるな」と思った。このように思ったのは，子どもは甘いものが好き，からすみの

ような辛いというか濃い味のものは好きではないと思ったからである。そしてそう思ったのは，筆者の個人的な発想と言うよりは，そういう日本の食文化のシナリオが背後にあったためだろうと思われる。

ちなみに上の子が妹に「おいしいよ，食べたら」と言ってあげたら，妹は舌をムニュムニュと出して，いかにもまずそうな顔をした。同じ姉妹でもずいぶん違うなと思った。

上の娘の子どもらしくない味覚はどうなったのかと言えば，私も彼女の祖父も，からすみなんか，子どもの食べる物ではない，だから食べてはダメとは思わなかった。むしろ彼女の祖父はからすみが好きな娘のために，それからしょっちゅうからすみをお土産に買ってきたりデパ地下で買ってきてあげた。娘はますますからすみ大好き人間になっていった。

しかし娘がかりに犬の肉を鍋にして食べたいと言っていたら，どうだったろう。これはさすがに認められなかっただろう。「何を言っているの？　かわいいワンちゃん食べたらかわいそうでしょう」と諭していたことだろう。そうしたら彼女が生まれ持っていたかもしれない，犬を食べたらおいしいだろうという想像力や犬の肉をおいしく感じる味覚は封じ込められたという自覚もなく封じ込められてしまったことだろう。

4　制約としての文化，恩恵としての文化

どの文化に生まれ落ちるかで人は世界のある部分に開かれ，ある部分には閉ざされる。何を食べるかで言えば，日本の食文化は犬の肉を食べる食文化からすれば，犬の肉には閉ざされているが，豚肉を食べないイスラム教徒とユダヤ教の食文化とくらべれば，豚肉には開かれている。食べ物のおいしさで言えば，豚肉を禁じるイスラム教文化圏に生まれたら一生分からないですごすであろう豚肉のおいしさを雑食文化の日本に生まれれば知る。しかし韓国や中国に生まれていれば知るであろう犬の肉のおいしさは知らないで人生を終える。日本の食文化は豚などの肉の美味しさを知るという意味では恩恵であるが，犬の肉の美味しさは知れないという意味で制約である。

生まれつき豚肉が好きという味覚，豚肉が食べたいという欲求をもっている人がイスラム教やユダヤ教の文化圏に生まれ落ちていれば，食卓に豚肉が並ぶことがないだろうから，一生，豚肉への味覚，欲求は満たされないまま，つまり豚肉の美味しさを知らないまま一生を終えるだろう。かりに豚肉文化圏で暮らすようになっても，三つ子の魂百までで食べたいという欲求は生じないことだろ。しかし豚肉への性向がある人が豚肉文化圏に生まれていれば，その味覚，欲求は十二分に満たされる。

Ⅲ　評価としての文化

1　評価の相対性・いいかげんさ

生まれつきの個性が抑圧されるか，伸ばされて開花するかは，生まれ落ちた社会や時

代の文化によるところが大きい。生まれつきの個性が生まれ落ちた時代や社会のと同じなら，その個性は問題視されることはなく，時には望ましいもの，好ましいものと肯定的に評価される。しかし生まれつきの個性が生まれ落ちた社会や時代の文化と一致しない場合は，否定的に評価され，そういった個性の持ち主は最終的には否定的なアイデンティティを持つようになるか，あるいはそういう個性を持っていないふりをするところまで追い込まれる。

しかし文化は変わりうるものである。それに応じ文化の一部である評価基準も変わる。今まで評価され人生の目標とされていたものはその価値がなくなり，それを目標にしてきた人はたとえば時代遅れと評されて，どーんと落とされることもある。その意味で人は生まれ落ちた時代や社会の評価基準に振り回されていると言えるのかもしれない。

男らしさ，女らしさというジェンダーも評価基準の一つである。かつて三船敏朗が「男は黙ってサッポロビール」という宣伝文句が1970年代前半に流れていた。男はよけいなことを言わないで寡黙なのがいいとされた時代であった。周囲の人間から男のくせにおしゃべりと言われていた私は，自分のことを口の軽い人間だと思い，男らしい男，すなわち寡黙な男になろうとした。しかしついしゃべりそうになって，その度に抑えるのはつらかった。

しかし東京オリンピックの翌年の1965年（昭和40年），高校2年生のとき，AFSという交換留学制度でアメリカの田舎町（中西部イリノイ州にあるフルトンという人口4000人の町）に一年近く滞在したときは，おしゃべりの私がbashful（はにかみや）と評された。そこで今度は，はにかみやさんのレッテルを返上すべく，無理してもっとしゃべるようにしたものの，bashfulの評価は変わらなかった。

2　自文化で価値あるものは異文化では必ずしもそうではない

AFSによる高校生留学に際しての英語のテストがあった。そのテストに向けて英語の特訓を受けて，晴れて合格した私は英語ができる自分という自己イメージを持ち，英語ができることをひそかに誇りに思った。小学校4年生のときに肺門のリンパが結核菌で炎症を起こし，一年休学した私はその後の小学生活で落第生というレッテルを貼られて身を縮めていた。しかしローマ字をすらすら朗読したことで落第生というイメージを払拭しかけたことをきっかけに，中学に入り英語に親しみを覚え，英語が得意科目になり，その波及効果か，他の科目にも自信を持てるようになった。英語の暗唱大会などで優勝し，英語ができることが他の学生と私とを区別する特性，アイデンティティになっていた。しかしこのアイデンティティは，留学先のアメリカの小さなコミュニティではくずれてしまった。なぜなら英語ができることは特段評価されることでも何でもなかったからである。

それどころか英語のおかげでマイナスのアイデンティティを持たざるをえなくなっ

た。私はラジオやテレビの語学番組を熱心に見ていた。番組の講師や外国人ゲストの発音に憧れ，時間があれば何度も反復練習した。その結果，まわりから「外人みたいな発音」と言われ，自分でもひそかにそう思っていた。しかし留学先の高校で他の生徒が教科書を音読するのを聞いていくうちに，語学番組の講師らの発音をそっくりそのまま模倣した私の発音はなにか不自然に強調した読み方だということが分かった。

かくしていわば彼の地ではできて当たり前のことである英語が話せることは，日本でのように私のつっかえ棒や私の価値を上げてくれたり価値を保ってくれるものではなくなった。また絶えずしゃべり続けろといわんばかりに言わんばかりの高校生活では，私の負い目であったしゃべりすぎは逆にしゃべらなさすぎに変わってしまった。

私たちは一般に，それを達成するといい評価をされることの実現に向けて無理を含めて努力し，逆に悪い評価をされないよう気をつけたり，それがやりたいことであっても悪い評価をされることには自己規制をかけたりする。そしてどこにいっても，いつの時代でもそういう評価がされると無意識のうちに考えている。そのくらい何が評価の対象になるか，どのように評価されるかは，当該の社会では自明視されているということである。

しかし努力や犠牲を払う価値あるとされる目標は，時代や社会によって異なる。そういった意味で相対的なものであり，いい加減なものである。だが人間はたまたま生まれ落ちた時代や社会で実現に値するものとされているもの，やってはいけないこととみなされていることは相対的なのに，もしかしたら気にしなくていいことを気にして，気にしなくてはいけないことを気にしないで，価値のないものを価値があると思って，価値のあるものに気がつかないで人生を送っているかもしれないのである。

3　評価者と評価の制度

どの社会にも目標を設定し，設定した目標にどのくらい到達したか評価を下す役割を果たす個人や組織，制度がある。子どもにしてみれば，よい子か悪い子かといった，とても気になる評価がある。これをやりなさいという目標を達成すればよい子と評価され，これはやってはいけないということをやれば，悪い子と評価される。子どもに対して目標を設定し評価するのは，家庭では，たとえば核家族では親であり，学校では教師であり，企業で言えば上司であり人事課である。

他方，親にしてもいい親か悪い親かという評価がある。どういう子どもに育てるか，どのように育てるかについて関して，社会的に設定されたもの，いい親，悪い親の判断基準があって，それから自由ではない。評価者たる教師も上司，教育委員会，また児童生徒学生から評される存在である。評価によって，教頭校長といった管理職へと昇進したり一介の教師にとどまるの違いが生じ，この違いによって生涯年俸が倍近い格差が生じる（教育データブック　2007年）。

評価は一生続く。友だちからの評価，地域での評価，就職してからは業績によって，

愛想がいいかなどによってなどなどである。その評価のなかで最初になされる親による子どもへの評価とその評価基準としてのアメリカの子育て文化への反応を小論の残りで取り上げたい。

Ⅳ　評価者として仰ぐアメリカ

1　モデルとしての欧米

日本は明治維新後，近代化，欧米化を行ってきた。その一つのやり方としては学者，役人，技師などを欧米諸国へ留学生を送って，彼の国の学問，科学技術，法律，政治制度などあらゆるものを吸収させ，日本に導入した。イギリスに留学したものの下宿先に事実上引きこもりをしていた夏目漱石は，文学だけでなくあらゆるジャンルの書物を収集し目を通していた。たとえば統計学の分散分析の統計値F値のことがその読書録に記せられているほどであった（狩野裕大阪大学教授　2003年　SPSSオープンハウスでの基調講演）。

他方，外国から直接，教師，技師，事務員，職工などを採用して，欧米の学問，科学技術の習得，導入をはかった。明治政府が明治5年（1872年）から明治31年（1898年）までの間に雇った外国人は2,265人に達し，民間や都道府県による雇用外国人は同期間で4,299人に及んだ（トゥンジョク　1996年　pp. 50–51）。しかし明治政府が雇った外国人の大部分はイギリス人やアメリカ人であった。

この近代化は大は天皇制による国民国家の創出に始まり，身近なところではざん切り頭をたたけば文明開化の音がするのように髪型，服装の欧米化から肉食，乳製品，パン食と食生活の欧米化にまで及んだ。しかしそれは全面的に欧米化したということではなく，和魂洋才の言葉が示すように，精神は日本，学問，技術は西洋という日本と欧米の文化の棲み分けも図られた（中村　2007年）。アンパンに象徴されるように，欧米と日本の伝統文化の融合もなされた。伝統的な食材であるあんこと欧米の食材であるパンとが融合した結果，アンパンが作り出されたのである。

2　テレビドラマの中のアメリカ

第2次世界大戦の敗戦以降，日本の目標と評価基準のモデルとしてヨーロッパは陰を薄め，アメリカが前面に出てくるようになった。子育てにおいても，親子のあり方においてもアメリカをお手本にするようになった。それは明治時代のようにお雇い以外国人教師が学校でアメリカの子育てを教科として教えるという形よりは，もっと大衆化した形を通してであった。1959年（昭和34年）2月から1963年（昭和38年）8月まで放映された「うちのママは世界一」（THE DONNA REED SHOW，KR現TBS））とか1958年（昭和33年）3月から1965年（昭和40年）3月まで放映された「パパは何でも知っている」（“Father Knows Best”）などに代表されるホームドラマを通してであった。

これら30分もののホームドラマに描かれる親子関係は筆者の家庭におけるのと，ま

たおそらく当時の日本の親子関係とは大いに異なるものだった。

私の母親は絶えず，私の顔を見れば「人の振り見て我が振り直せ」とか「口は災いの元」とかの小言をしょっちゅう言っていた。しかしアメリカのドラマの母親はこざっぱりとした格好で，いつも笑顔を絶やすことなく，小言などは言うことなく同じ母親とは思えなかった。

父親もそうだった。私の父親は異議を申し立てると「理屈を言うな」とか「チャランケぬかすな」（チャランケはアイヌ語で議論という意味。私の家では転じて口答え）と頭ごなしに押さえつけにかかるのが常という，いわば非民主的，封建的な父親だった。他方たとえば「パパは何でも知っている」のパパは，静かに子どもの言うことに耳を傾ける「民主的な」父親像そのものであった。子どもたちはそのような親の下で伸び伸びとしているように見え，とてもうらやましかった。

またテレビドラマに描かれる学校生活も，試験も宿題もなく，あってもそんなの関係ないかのように気にしないでバスケットボールをしたり，デートをしたりで，とても自由な学校生活を送っているようにみえた。

3　評価基準としてのアメリカ

ホームドラマや映画などの大衆文化を通して，日本人はアメリカを憧れの目で見るようになっただけでなかった。日本の社会のあり方，人間関係，人としてのあり方，コミュニケーションスタイルなどもアメリカを基準にして評価するようになった。曰く，アメリカは人の目を気にしないで自分の好きな服装をしたり，自分の意見をはっきりと言える個人主義の社会だ。しかし日本は出る杭は打たれる社会，すなわちやりたいことを我慢せざるを得ない集団主義の社会といった自己認識が染みついていった（賀川 2002年　pp. 94–96）。

このような否定的な評価にともない，アメリカでこれがいけない，あれがいいとされることは数年後には，日本にも導入されるようになった。たとえば子育てで言えば，母乳や抱っこは母子密着で，親離れできない子どもを作ってしまうからいけない，逆に自立した子に育てるには粉ミルクにして，こどもが夜泣きしても一定の時間は放ったらかしにした方がいいという母子分離の風潮がアメリカで強い時は，日本の育児の専門家の間でもっと母子分離をしなくてはという追随がなされる。しかしスキンシップを重んじる空気がアメリカで出てくると，こんどはそれに逆追随するという傾向が見られる（恒吉，ブーコック　1997年　一章，NHK　2001年　榊原）。

4　いい親，悪い親アイデンティティ

この追随，逆追随が起きる背景には，日本の子育てがいけなくて，アメリカのはいいというのが前提にあって，日本の子育てをしている親は悪い親，アメリカの子育てをしている親はいい親というアイデンティティも作用しているものと思われる。

たしかに子どもが伸び伸びと育ち，人の顔色をうかがうことなく相手の気持ちを気遣

いながら自分が正しいと思うことを言える，そういう気遣いができなおかつ自立した人間へと育てる子育てなら取り入れる価値はあるだろうし，取り入れたいという気持ちになるのは親として自然な感情だろう。そのような人間へと我が子を育てる上で母乳とか夜泣きした子どもを抱っこしてあやすのは，つまり親子のスキンシップは障害であるとしたら，そしてそういう育て方が伝統的な日本式の子育てとして否定的に見られている環境では，そのような母子密着型の子育てをやめ，母子分離の子育てを取り入れようとする気持ちになるのも親として自然な情であろう。

このような追随や逆追随の背後にあってこのような追随，逆追随へと促すものとしては，親として自然な情に加えて，アメリカを権威を仰いで，アメリカでいいとされればいい，悪いとされればいいとする空気がある。みんながそう言っているから，テレビに出演する専門家もそう言っているから，学校でもそう言っているからということだけを根拠にする心的態度である。

そこには批判的精神に基づいた実証的な精神が欠如している。言い換えれば母子密着型が果たして懸念されるような依存的性格の子を作ったり，子離れできない親にしてしまう子育てなのかどうか批判的にみて，はたしてそうなのかどうかを事実に即してみようとする精神がない。同様に母子分離が言われているような独立心旺盛な人格を作り上げるのかどうかを，批判的にみて，事実そうなっているのか，事実に照らして検証しようという精神もない。

5　反証例への反応

アメリカに対するイメージは他のイメージ同様，個々人が生まれ持ってきたものではない。生まれ落ちた時代や社会のメディアや政府，学校が構築して流布しているイメージ，いわゆるステレオタイプである。太平洋戦争中の日本なら鬼畜米英のイメージに，とくにナイーブな子どもたちや青年たちはこのようなイメージに染まりがちだった。しかし戦後，明るく豊かで民主的というイメージでアメリカをメディアや政府，学校が描くようになると，そのイメージがアメリカの実態そのものだと思ってしまう世代が出現したとしても不思議ではない。

メディア，学校などによって与えられる情報のなかには，全体の中から取り出された一部でしかないものもある。たとえば民主的にして，非権威主義的な父親という父親像である。しかしこのような父親がアメリカではどこに行っても，どの階層にもふつうにいるという過剰な一般化がされると，それはステレオタイプである。

ある団塊の世代の研究者が「『うちのパパは何でも知っている』を小さいときに見てものすごくうらやましかった」とアメリカ人の聴衆を前にして話をしたとき，聴衆から「私も，アメリカにもあんな家庭があるのかと思って，実にうらやましかった」という声があがって大笑いになった経験をしている（柏岡　1996年　p. 11）。

筆者自身，AFS による留学で二つの家庭にホームステイしたが，最初の家庭の父親

は権威主義的であった。「おなかいっぱい（“I’m full.”）」と言ったら，ホストファーザーに「満足している（“I’m satisfied.”）」と言いなさいと命令口調で言われた。こんな細かなことまで注意するとは，子どもの自由を認めるテレビドラマの親たちからは想像できなかった。

ホストファミリには高校 3 年生の長女と中学 3 年生の長男がいたが，親の言ったことに Why? と聞いて間接的に異議を申し立てると“Because I say so.”と有無を言わせない態度だった。親の権威に服従させようとする態度であって，順々となぜいけないか合理的な根拠に訴えようとする『うちのパパは世界一の父親』の態度とは違っていた。

子どもが言うことを聞かないと，しばらく様子を見守ることはなく，いきなりきつい口調になっていった。最初は“Diane, don’t do that.”と下の名前を言って，やめるように言うのが，すぐやめないと，“Diane, you must stop doing that.”と“you must”と一段階きつい言い方になり，それでも言うことを聞かないと，“Diane Faber, don’t you ever do that again!”とフルネームで呼んで，倒置の don’t you でやめろと言う命令の強さを強調し，さらに強意語の ever と一緒に用いて強めた。

このように事実だと思っていたこと（アメリカの親は民主的でこどもを一人の大人として扱う）と反する事例，反証例（権威主義的でまるで犬か猫をしつけるような態度をとる）が出てきたからといって，必ずしも元々抱いていたイメージが全面的に虚構ということにはならない。アメリカの親がみな権威主義的とは限らないからである。遭遇した事例は例外かもしれないし，一つのパターンにすぎないかもしれないからである。しかしもしかしたらその事例は典型的なパターンの一つかもしれないのである。つまりもしかしたらアメリカの親はえてしてこういう権威主義的な親が多いのかもしれない可能性は否定できない。

そこで実際はどうなのか知るためには，事例を集めていくとか自分で調査することの他に，すでに行われた調査結果をみるという方法もある。筆者が育児についての人類学者や心理学者，社会学者，教育学者などの研究者による調査を見ていったら，日本の研究者がアメリカの研究者と行った調査に遭遇した（東，柏木，ヘス　1981年）。たとえば野菜をたべようとしない 3 歳と半年の子どもに日米の母親がどのようにして食べさせようとするのか，どのような根拠を持ち出して食べなくてはいけないとするのかを，そういう状況を想定してふだん言うように言ってもらった調査である。

アメリカの親は「ぐずぐず言わずに食べなさい」と親の権威に訴えるやり方がもっとも多く50％であった。他方このやり方をする日本の親は18％にすぎなかった。日本の親で多かったのは「これを食べないと大きくなれないよ」とか「食べないと病気になって遊べないよ」と，食べないとどういう結果になるかに訴えるものが37％であった（アメリカは27％）。残りの63％は権威主義的でないということである。

6　想定外の異文化に触れた時の一つの反応――違和感の抑圧

しかし思い入れが強い人の場合，当然こうだろうというのと事実が違っていた場合，事実の方を何かのまちがいだとか何とかして認めようとしない傾向がある。しかし事実そういう事例が現実にあることを認めざるを得なくなると，反証例は例外であって決して典型ではない，それを典型のように言うのは偏見であるといった非難を逆にそのような事例を出した人に向けてでも，元のイメージにしがみつこうとすることもある。あるいは別の話にすり替えて，反証例を正当なものとする戦略に打ってでることもある。

筆者の教えた異文化間コミュニケーション論という科目の受講生で，アメリカにホームステイしていたとき口に手を当てて笑ったら，ホストマザーにきつい調子でそんなことをするなと注意されたことがある学生がいた。彼女は何でやめなくてはいけないか分からなくて，理由を聞いたら「あなたはアメリカ文化を学びに来たのでしょう？　アメリカでは笑う時に口に手を当てるなんてことはしないの」と言われたそうである。この学生は頭が真っ白になりながら，「そうだ，自分はアメリカ文化を学びに来たのだ」ということで自分を納得させたそうである。

しかし彼女はその後，このできごとを忘れていた。思い出したのはこの異文化間コミュニケーションという授業で，私が文化は第二の本能で無意識のうちに私たちの行動に影響することの例として，文化によって異なる物理的な距離のとり方の話をした時だった。公的な関係での距離や親密な間柄との物理的な距離が文化によって違っているが，人は無意識のうちに自文化によって処方された距離のとり方をし，異文化の人の距離のとり方に，図々しいとか，水くさいという反応を互いに持ってしまうという話をした（ホール　pp. 235–237）。異文化の人間が出会ってコミュニケーションをとろうとする時，体に染みこんだ自文化による行動を無意識のうちにお互いに行う。だから異文化の人とのあいだのインターアクションないしはコミュニケーションにおいて，一方のやり方だけでインターアクションないしはコミュニケーションをとろとするのは，異文化コミュニケーションではなく同文化コミュニケーションと変わらないのではという仮説を私が出した時，この女子学生は手を口に当てるなという経験を思い出したのだった。

彼女は強烈な違和感，つまり反発を覚えたことも同時に思い出した。そして彼女はアメリカ文化を学びに来たのだからやめなさいというホストマザーのことばを無理に引き寄せることで違和感を消し去ろうとしたのではないかという解釈をした。

もし彼女が違和感を抑圧しないで，イメージの検証ということに向かっていれば，話は違っていただろう。たとえばアメリカの親の中には子どもを大人として扱い，子どもの意志ややり方を尊重するというのと正反対の態度をとる親もいると，反証例を反証例として認識できたであろう。

さらにはアメリカは，いろいろな文化を受け入れ，尊重する。だからいろいろな文化が花開くメルティングポットとか，いろいろな移民の文化が尊重されその結果，多文化

が共生する社会という，日本でもアメリカでも抱かれているアメリカについての言説を，この親の言ったこと，すなわち「アメリカなんだからアメリカのやり方をしなさい」に照らして，検証することもできただろう。すなわちメルティングポットなどのイメージが事実なら，日本のやり方を尊重したり興味を示して，「それはすてきなたしなみね」と取り入れることもありうることである。少なくともやめなさいといった非寛容的な態度はとらないだろうと予想される。しかし実際はこれとは正反対で，アメリカ文化の前には日本文化は退場させなさいと言わんばかりの態度であった。そこから異文化の人間がそれぞれの自文化に規定されて無意識に行う行動をアメリカ人は果たして認めるのかどうか，検証の第一歩を踏み出せたはずである。

7　予想外の事態，反証例への対応の類型

アメリカをお手本にして憧れ，さらにアメリカを評価者に置き，自分の価値はアメリカから認められてなんぼのものと思っている人がいたとする。このタイプの人たちはアメリカと違う自分に劣等感を抱きがちである。このタイプの人たちはアメリカに憧れる根拠となったことを覆す事例に遭遇したとき，どうしたらアメリカを少なくとも絶対的な評価者としてみなすことに疑いの目で見始め，さらには日本のことを自分自身の目で見て，またアメリカのことも自分の基準で見て，ひいては普遍的な基準を構築して，自他を見るようになるであろうか。

この問いへの答を見つけ出すことは次の論文の課題にしたいが，ここでは予備的な作業として，類型の構築とこの問いの答えが入ってそうなデータセットの紹介にとどめたい。

データセット

データセットの方は，アメリカ人が人目を気にしないでのびのびとした性格や自己主張をできるのにたいして，できない自分たち日本人というイメージを持っていて，それはそういう性格に育て，そういう能力を育てる家庭環境や学校に原因があると考える学生（2008年度春学期愛知学院大学文学部国際文化学科の学生を対象とした比較文化論・同グローバル英語学科の学生を対象にした欧米文化論という科目）が，アメリカ人がそれほど伸び伸びしていないとかそれほど自己主張しないという反証例に遭遇したらどう対応するか，またアメリカの家庭環境，言い換えればアメリカ人の親がそれほど子どもを一人の人格として愛情を持って育てていないように見える事例に遭遇したらどういう反応を示すかというものである。mixi 上に開設したこの科目のコミュニティ（「08年比較文化論・欧米文化論」）への書き込みがデータとなる。

NHK の番組で世界の子育ての特集番組があった（NHK　2001年）。その中で夫は広告代理店に勤め，妻は弁護士をしている，ニューヨークのディンク（共働き）の夫婦が紹介されていた。ヘドリーちゃんという生後 8 ヶ月半になる娘がいるが，昼間はベビーシッターに預け，夫婦は夜は 7 時から 9 時の 2 時間，ヘドリーちゃんと遊ぶが，9 時に

なると別室の寝室に寝かせ，様子を見に行くこともしない。

寝かしつけるとき，一緒にいないのは，遊び疲れてすぐ寝るからというのが母親の説明だが，実際は30分かかっていた。

子どもといるのは2時間だけとか，寝室を別にするという行動の裏には，この行動をよしとする考え方があるわけだが，インタビューによると以下のような説明を夫婦はしていた。

表1　ニューヨークのカップルの事例

英語インタビュー	日本語訳
Husband: respect for the individuals as far as our child is an individual and er parents as a couple respect each other's spac.	夫：個人であることを大事にする，つまりうちの子どもが一個の個人である限り，またカップルとしての親として，互いの空間を尊重するということ。
Wife: Good point.	妻：いい点ね。
I think I would wake up more frequently because the baby sitll wakes up at night	考えてみれば，うちの子はまだ夜目が覚めることがあるから，もし一緒の部屋で寝るとか，添い寝をしたら，私は今よりもっと目が覚めると思うわ。
and now in another room with monitor we can hear her and we can listen to see she's very unhappy, that she needs to be comforted,	だけど今は別の部屋で寝かせているけど，マイクで音をひろっているから，耳をそばだてれば何か気分が悪いときとか，あやしてほしいときは分かるわ。
but more and more often she's just making a little noise in her sleep and puts herself back to sleep.	寝ている最中，声を出したりするのがますます増えているわ。でも独力でまた寝入っているわ。
I think if she is making the noise next to me, I would more apt to be more frequentlty woken up.	そんなふうだから，あの子が隣に寝ていて声を出されたりしたら，今よりもっと頻繁に起こされてしまうと思うの。

そこに見られるポイントは以下の7点になるかと思う。

1　夜は夫婦のニーズを赤ちゃんのより優先する。

2　機械的と言っていいくらい規則的にルールを適応する。

3　赤ちゃんも一人の人格として親の寝室に入ってこないことで親のプライバシーを尊重すべきなので，そうさせている。

4　親も赤ちゃんを一人の人格としてみなして，赤ちゃんの寝室に入らないことによって赤ちゃんのプライバシーを尊重すべきだし，事実そうしている。

5　赤ちゃんには自分で眠りに入る能力があり，親が寝かしつけたりむずかゆがったりした時に様子を見に行くと，その能力を阻害することになる。

6　赤ちゃんの持っている能力を育むのは親の仕事であり，それは愛情から発している。

7　赤ちゃんに何かあればマイクを通して分かる。

このインタビューを見てmixiに書かれた41件の反応のうち，過半数を超える24件は

日本，欧米の両方ともいいところもあるし問題もある，いいところは全面的ではないが取り入れると日本の育児の問題の解決になる というバランスのとれたものだった。

14件は，この夫婦の考え方にたいする違和感やこういう理由ではまずいのではないのか？　とういう意見だったが，日本がいちばんとか欧米のをこんなひどいと露骨にいうものはなく，どれも抑制のきいたものだった。

しかし NHK がこの夫婦の子育ての仕方をとりあげたことに強く反応する応答があった。

教材に使われている NHK の特集番組のことです。素直に見ているときは何の疑問もありませんでしたが，よく考えてみると「NHK がこの番組を作った主旨・狙いは何なのか？」が知りたくなりました。

というのは，育児のケースが NY にしろ，ユトレヒトにしろ，かなり過激なケースが例示されているように思えたからです。もちろん日本でも赤ちゃんの時から親子別室の育児もあり，「おくるみ」という赤ちゃんが身動きできないような和製ブランケットもあります。

「このように，国により人種により文化には違いがある」と，異文化を紹介する目的ならうなずけますが，「このように，国により人種により『日本人には受け入れがたい』文化がある」と文化の優劣を紹介する目的であれば，うなずけないのです。

先生がお教えになるように，文化に「良い文化，悪い文化」などあるはずがありません。それをあたかも「こんなひどい文化」として他国の例を示せば，視聴者は「ヤッパ日本がイチバン」という不遜な思想を植えつけられる恐れがあります。戦前の日本のように。ですから NHK の製作意図が気になってきたのです。

年寄りが気にすることではないといえばその通りですが，明日の日本を背負って立つ若者が，偏見を持たないで世界に出て行って欲しいのです。

類　型

これらの反応をより詳しく分析するために，予想外の事態に遭遇した際の反応を，(1)違和感を抑圧するかどうか，(2)違和感を感じたものの理解に向かうかどうか，(3)普遍的なものに向かうかどうかで，類型化してみると以下のタイプを立てることができる。

ちなみにここで言う理解とは以下の 2 つのことを指す。一つは違和感を自文化からの反応として相対化し，異文化に人たちに寄り添って，彼ら彼女らの目には自分たちの行動はどう映っているのか，理解しようとすることを指す。もう一つはそのような異文化の行動なりがどのくらい典型的，一般的なものか分布を探り，その上で何によって生じるか，原因を探ろうとするものである。

その１　逆転させるタイプ，タイプ I

予想外の事態に遭遇した時に湧き起った感情的な反応を抑圧しないばかりか，元々もっていたイメージをひっくり返し，予想外の事態がその社会では典型的，代表的なものと一般化してしまう反応である。果たしてその事例がどのくらい一般的か，どういう性格やどういう社会層，どういう地域の人間の間で見られるものかを検討することに

よって全体像の把握に向かおうとしないという反応である。

このタイプは自文化からの反応を相対化もしないし，また異文化の視点から異文化の人々の行動を理解しようともしない。

たとえば先に紹介した手を口に持っていく例でみると，彼女の驚きの背後にはアメリカ人は異文化を受け入れるのに対して日本人は受け入れないという一般化がある。この行動傾向の違いは，アメリカは移民社会でいろいろな人種や民族から構成されているという人口動態的な特性にその原因が求められる。他方，日本については島国で「単一民族」，単一文化社会だからということに原因が帰属される。

なお単一民族社会という一般化は，60万人の在日朝鮮人，韓国人，10万人のアイヌ民族，５万の華人（中国人），同じく60万人ぐらいの外国人就労者たちのなかで日本に定住しはじめている人たちを考えると，いる人たちをいない扱いにするという意味で，またこれらの人たちの文化をも無視するという意味で，過剰な一般化というよりは差別である。

単一民族，単一文化だからどうなのかとこの日本人論は言うかというと，それは日本人が異文化や異文化の人々を排除する意識を持っているからだと言い，そして拝外意識の寄って来たるものを，単一民族で保ってきた血の純粋さを守ろうとする意識に求めたり，日本文化の純粋さを守ろうとするメンタリティに求めたりする。これらが史実か，事実かの判定にあたっては，これらの言説に都合のいいものだけが選択し，証明とする。

他方，アメリカ人については異文化への寛容な態度とか異文化を受け入れる広い心という国民性が移民を受け入れ，そして異文化を受け入れることの原因として帰属される。

この逆転タイプの人たちはそうでない事例，すなわち反証例に出会うと，アメリカ人はみな異文化を見下し，排除しようとすると，認識を逆転させ，アメリカ人に対して持っていた劣等感を優越感にとって変える。ちなみにこのタイプが出現する確率は低いと思われる。

その２　違和感を抑えないで理解に努めるタイプ，タイプⅡ

違和感を抑えないがタイプⅠのように認識と評価を逆転させるのではなく，反証例から過剰な一般化を禁欲して，いったん抑えた違和感は日本文化によって生じたものとして相対化して，相手の視点になって理解しようとするものである。文化相対主義から来る反応である。

その３　違和感は抑えず普遍的なものを目指すタイプ，タイプⅢ

このタイプは，違和感を抑制して相手の視点に立とうとするが，それでもあの夫婦の対応はひどいという違和感は文化を越えて，たとえば普遍的にひどいものがある可能性から生じているのではと，普遍的なものの発見に向かうものである。

その４　違和感を抑えて，反証例を無視して元のイメージにしがみつくタイプ，タイプⅣ

このタイプは反証例を例外視したりほんの一部のこととしてしか認めず，理解や検証に向かわず，アメリカの子育てを普遍的なものとみなしたままにして，元のイメージを守ろうとする。

その５　文化相対主義による不可知論

最後の反応は違和感を出すことへの反発があるが，表向きは文化相対主義のスタンスをとり，その実，逆自文化中心主義の二重基準をもったものである。その二重基準とは以下のものである。

1　文化にはよい文化も，悪い文化もない
（そのくせに日本の文化には批判的という二重基準で，いいか悪いかを検証の対象としない）

2　従ってアメリカの文化が悪くて日本の文化はよいというのは，不遜な思想であり戦前の日本の辿ったコースへと日本を突き進ませる危険な思想でもある
（思想について文化相対主義の立場を適応すれば，不遜とか危険という価値判断はないはずである）

終わりに

アメリカ文化を基準にした評価からの自由は自文化である日本文化を絶対化してという方向もあるが，文化相対主義によるものや普遍的な基準によってアメリカのを基準とした評価から自由になるという方向も考えられる。その際の障害は異文化なり自文化を絶対化するという態度と本来，これらの逆自文化中心主義や自文化中心主義の解毒剤として作用するはずの文化相対主義の誤用である。相対主義が誤用されるとどのように障害になっているか，どのような普遍的な視点から評価からの自由が獲得されるかについては次の論考の課題としたい。

参考文献

注：以下の文献は小論で参考にしたものもあるが，大半は子育ての日米の文化を題材に文化相対主義の誤用を検証するために次の論文で参考にするためのものである。

東 洋 『シリーズ人間の発達12　日本人のしつけと教育――発達の日米比較にもとづいて』東京大学出版会　1994年

NHK 「ウィークエンド・スペシャル　発見！　世界の子育て　第1回『だっこ』――親と子はどこまで近づくべきですか」 2001年4月7日放送　BS1

大日向雅美 『子育てと出会う時』 日本放送協会　1999年

賀川洋 『対訳誤解される日本人――外国人がとまどう41の疑問　The Inscrutable Japanese』講談社インターナショナル　2002年

柏岡富英 『アメリカの思考回路――実験国家・その純真と不遜』 PHP 研究所　1996年
柏木恵子 『子どもという価値――書誌か時代の女性の心理』 中央公論新社　2001年
栗原祐司，森真佐子 『海外で育つ子どもの心理と教育――異文化適応と発達の支援』 金子書房　2006年
小西行郎 『赤ちゃんと脳』 集英社　2003年　序章　泣く微笑む　6章　抱っこ
佐藤叔子 『イギリスのいい子日本のいい子』 中央公論新社　2001年
佐藤宏樹，武石恵美子 『男性の育児休業』 中公論新社　2004年
清水一彦他『教育の全体像が見えてくる　最新教育データブック―― A Data Book of Educational Statistics 第14版』 時事通信社　2007年
示村陽一 『異文化社会アメリカ』 研究者　2006年
千石保 『いつ〈日本人〉になるか　日米母子調査にみる育児と文化』 小学館　1984年
品田知美 『〈子育て法〉革命――親の主体性をとりもどす』 中央公論新社　2004年
シング, J. A. L 著，中野善達，清水和子訳 『野生児の記録 1　狼に育てられた子』 福村出版　1977年
田下昌明 『真っ当な日本人の育て方』 新潮社　2006年
田中喜美子 『母子密着と育児障害』 講談社　2004年
恒吉遼子 『人間形成の日米比較――かくれたカリキュラム』 中央公論新社　1992年
恒吉遼子，S. ブーコック 『育児の国際比較――子どもと社会と親たち』 日本放送出版教会　1997年
トゥンジョク，A. メテ 『トルコと日本の近代化――外国人の役割』 サイマル出版会　1996年
トビン，ジョセフ 『ニッポン幻想――〈甘え〉からみた日米比較』 講談社　1983年
中江和恵 『江戸の子育て』 文藝春秋社　2003年
長坂道子 『世界一ぜいたくな子育て――欲張り世代の各国の「母親」事情』 光文社　2005年
中村修也監修 『よくわかる伝統文化の歴史⑤文明開化の日本改造――明治・大正時代』 淡交社　2007年
夏目幸子『日仏カップル事情――日本女性はなぜモテる＋』 光文社　2005年
根ヶ山光一 『〈子別れ〉としての子育て』日本放送出版教会　2006年
パターソン, ジェームズ，キム, ピーター著 『アメリカ人のホンネ――仕事・カネ・暴力・セックス etc.　全米調査レポート』 ダイヤモンド社　1992年
波多野誼余夫，高橋惠子 『こどもの教育　文化心理学入門』 岩波書店　1997年
ハリス，ジュディス著，石田理恵訳 『子育ての大誤解――子どもの性格を決定するものは何か』 早川書房　2000年
広田照幸 『日本人のしつけは衰退したか――「教育する家族」のゆくえ』 講談社　1999年
藤永保監修，勝浦クック範子 『ライブラリ・明日に育つ子どもたち　3　日本の子育て　アメリカの子育て――子育ての原点を求めて』 サイエンス社
ホール，エドワード著，國弘正夫訳 『沈黙のことば――文化，行動，思考』 南雲堂　1966年
松居和 『子育てのゆくえ――子育てしないアメリカが予見する日本の未来』 エイデル研究所　1993年
松尾弌之 『アメリカのことが 3 時間でマスターできる本』 明日香出版社　2002年
松尾壽子 『国際離婚』 集英社　2005年　p. 188　スキンシップ　性的虐待

松田道雄　『育児百科』　1967年　岩波書店
箕浦康子　『シリーズ人間の発達６　文化のなかの子ども』　東京大学出版会　1990年
山口創　『愛撫・人の心に触れる力』　日本放送出版教会　2003年

〈英語文献〉
Harris, Louisem 1987 *Inside America*, Vintage Books

〈インタネット上のサイト〉
ウィキペディア　復活祭の記述
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%A9%E6%B4%BB%E7%A5%AD
ウィキペディア　イースターエッグの記述
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%83%83%E3%82%B0